

東北大学の「臨床宗教師」養成構想

東北大学大学院文学研究科教授 鈴木 岩弓

「臨床宗教師」という聞き慣れないであろう用語は、現在東北大学の実践宗教学寄附講座においてその養成の基礎研究を進めている、超宗派超宗教的に宗教的ケアを行う高度専門職業人のことである。こうした専門職の必要性に気付くようになったのは、東日本大震災に際した被災者支援の現場からである。

震災直後の五月より、仙台では仏教・神道・キリスト教・諸教の宗教者が集まって「心の相談室」という被災者支援組織の活動を開始した。この組織が目指す目的は、「震災犠牲者の弔い」と「遺された人々のグリーフ・ケア」といった宗教者ならではの「死」に関わる問題に特化され、遺族に対する包括的な支援を目指していた。その活動を進める中、とりわけ電話相談と移動喫茶の活動では、身近に「死」を経験したり、自身が「死」を見つめている人と直接対峙する機会がしばしば出てきた。これに対応する宗教者の多くにとって、

もともと関係のある信者に対して「死」をめぐる事柄と向きあうことはさしたる問題ではない。しかし姿の見えない電話相談や移動喫茶で初めて会う被災者たちは、まず自分と同じ宗派宗教とは限らない。いや例え同じ

宗派であったとしても、地域の宗教伝統が異なれば、同じ宗教基盤を共有しているとは必ずしも言えないのである。これまでに日本の多くの宗教者は、自己の宗派宗教の信者に対し、自己の宗派宗教を語ることでその仕事は完結していた。しかし今回の震災のような非常時には、宗教者たちは自己の殻の中に留まるわけにはいかなかったのである。これはある意味、宗教が公共性を持つことが期待されている証でもあった。



第2回「臨床宗教師」研修での追悼行脚（石巻市渡波にて）

こうしたことに気づいた「心の相談室」の宗教者たちからは、宗教的背景の異なる被災者に対する宗教的ケアはいかにすべきか？宗教者が、自己の宗教の布教ではなく、超宗派超宗教的に宗教ケアを行うことは可能か？などといった問題提起が具体的に出されるようになった。その結果、そうした観点に対応可能な専門職としての

「臨床宗教師」養成システムの研究が、昨年四月から実践宗教学寄附講座において開始されたのである。牛歩の歩みを進めだした我々であるが、超高齢多死社会を迎える日本の将来には、全国の病院・介護施設などの全てに、「臨床宗教師」が一人はいる社会の実現を考えている。そうした終着点を見すえての「臨床宗教師」養成構想は、宗教界が社会に発信する social movement でもあるのである。

なお、実践宗教学寄附講座の活動に賛同されてご寄附いただけの方がいっぱいありましたら、下記の東北大学宛に「寄附講座に寄付をしたい」旨ご連絡いただけましたら幸いです。

千九八〇―八五七六
仙台市青葉区川内二七―一
東北大学大学院文学研究科

会計係

Tel: 〇二二―七九五―六〇〇七
E-mail: art-kaik@bureau.tohoku.ac.jp

鈴木 岩弓 (すずき いわゆみ)



一九五一年東京生まれ。東北大学文学部卒業後、同大学院博士課程へ。島根大学助教授、東北大学助教授を経て一九九七年より同教授。専門は宗教民俗学で、東アジア諸国などのフィールドワークを通じて日本人の死生観や民間信仰の研究を行う。主な著作『いま、この日本の家族―絆のゆくえ―』（弘文堂）他

新しい試みに 意識向けよう

共同通信社 編集委員 西出 勇志

臨床哲学という言葉を初めて聞いたのはいつだっただろう。はつきりとした記憶はないが、耳にした時の驚きはよく覚えている。講壇の色彩が強い「哲学」と、現場感覚が横溢する「臨床」。予想もしなかった単語の組み合わせが、一気に時代を切り開く。言葉の持つ力を痛感した瞬間だった。

臨床を冠した言葉は今や珍しくなくなってきたが、「臨床宗教師」には意表を突かれた。信仰共同体の内部だけではない、もっと開かれた場所、地に足をつけて活動する宗教者。そんなイメージを喚起する強さがある。ただ、概念先行の新語ではない。看取りの現場に長くいて、宗教の必要性を感じた故岡部健医師の中から立ち上がったきた言葉である。そして東日本大震災によって、公共性を帯びた臨床宗教師の具体的な像が結ばれた。そこには宮城県における宗教協

力の長い歴史に加え、災厄に共に立ち向かうという宗教者の思いがあり、アカデミズムがこれまでと違う領域へと一歩踏み出す勇気があった。取材を通じて感じたのは、臨床宗教師の成立にいたる重層的な厚みと、「超宗派」活動がもたらす各自の信仰の深まりである。

現在、宗教をソーシヤル・キャピタル（社会関係資本）の観点から捉える動きが話題を集める。臨床宗教師に加え、全国青少年教化協議会の臨床仏教師養成講座も始まっており、社会関係資本としてどのような役割を担うのか、大いに注目したい。

活動は始まったばかりであり、課題はさまざまにあるだろう。建設的批判も含め、新しい動きに常に意識を向け続けることの大切さを共有できればと思う。

「臨床宗教師研修」 を受講して

曹洞宗 普門寺 副住職 高橋 悦堂

そこに「仏」を観た。



第2回研修前半、南三陸町追悼行脚の途中、石巻市渡波の漁港にて追悼儀式

嵐の石巻、波しぶき激しい岸壁の上、僧侶が並び、嵐の轟音をかき消さんが如く読経する姿に「仏」を観た。宿泊先の寺院本堂、朝の静謐な時間の中、己が宗旨・宗派を超え皆で「南無阿弥陀仏」と念仏をした姿に「仏」を観た。仏道者のひたむきな姿を観たとき、私は涙を流していた。

かつて、永平寺の僧堂で独り夜坐をする先輩僧の姿に「仏」を観た時、流した涙と同じだった。異なる宗派の方の行から、あの時と同じ思いがこみ上げてくるとは思ってもいなかった。

臨床宗教師研修の生みの親ともいえる故岡部健医師は語られた。「医療と宗教の連携について、な、人間ひとりひとりの信頼や結びつきから始めなきや駄目なんだ」と。

この言葉は宗教者同士の連携と読み替えてもよいだろう。公的機関と連携する場合、宗教間協力の姿勢が受け入れてもらいやすいという狙いもある。その為には互いの信心に感動し、異なる信仰者を尊敬する事が絶対条件だ。先に記した研修の経験から、私はそれが可能であると確信する。

私が研修から得た一番のものは、信心を異としながら「仏」としての志を同じくする仲間の存在である。全国から集まった仲間達は今、それぞれの地元に戻り活動を始めている。現在、公的機関で活動できる素養を持った宗教者は、医療、福祉など各分野から期待されている。歩み出したばかりだが、仲間と切磋琢磨し、社会からの要請に応える臨床宗教師となるよう励みたい。

シンポジウム「いのちと原子力②」参加者に聞く 放射能被害への意識調査結果

前号ではシンポジウム「いのちと原子力②」放射能被害とは？」について各講師からの特別寄稿を掲載いたしました。今号では来場の参加者にご協力いただいたアンケート集計結果を掲載します。

調査対象…三月八日開催シンポジウム参加者全員
ウム参加者全員

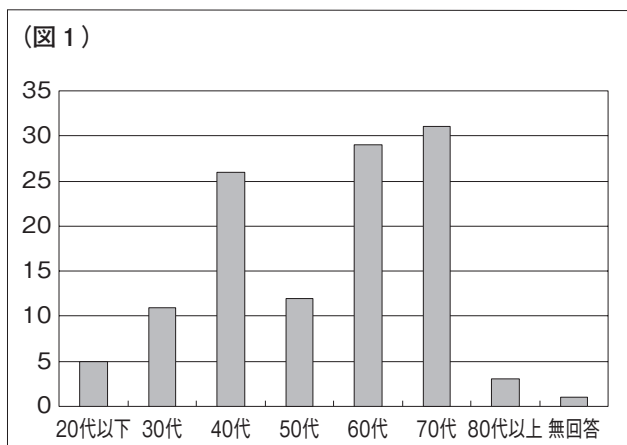
調査方法…参加者全員へ選択式及び記述式アンケート用紙を配布・回収

シンポジウム当日は二百名が来場、アンケートには百十八名の回答をいただきました。

※前回シンポジウムのアンケート結果は機関誌『全仏』五八四号に掲載

幅広い年齢層の方が参加

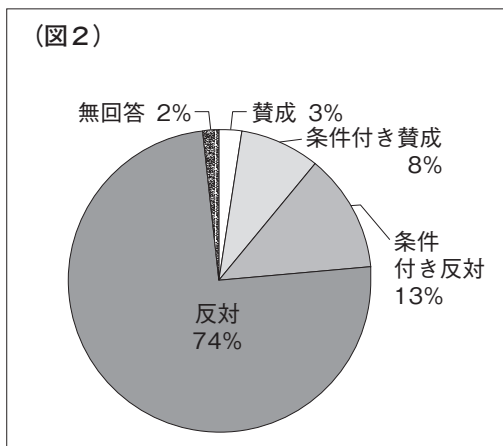
今回のシンポジウムには二十代から八十代まで幅広い年齢層の方が参加され、七十代が三十一名と



最も多く、次いで六十代が二十九名、四十代が二十六名と続きました。参加者の性別は男性七十三名、女性三十四名、無回答十一名と前回のシンポジウムに続いて男性の参加者が目立ちました。職業は無職二十八名と最多でしたが、次いで宗教者が二十五名と、宗教者もシンポジウムに高い関心を寄せました。(図1)

原子力発電にはほとんどの参加者が「反対」と回答

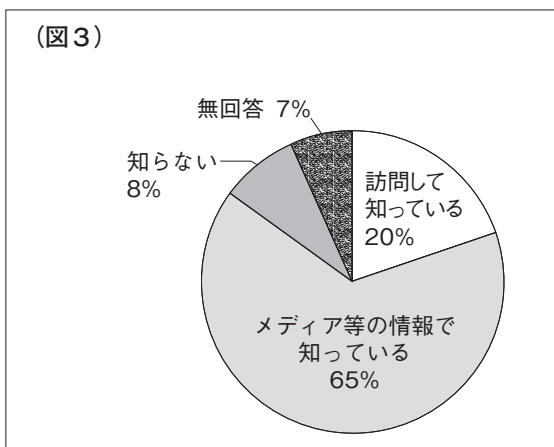
「原子力による発電は賛成ですか？」という問いに対しては、反対が七十四%、条件付き反対が十三%と反対意見が多数を占め、賛成と反対が割れた前回シンポジウムのアンケートと異なる結果になりました。(図2)



被災地を訪問した参加者は二十%

「福島第一原発事故による放射能被害に遭った地域の状況をご存じですか？」という問いに対して

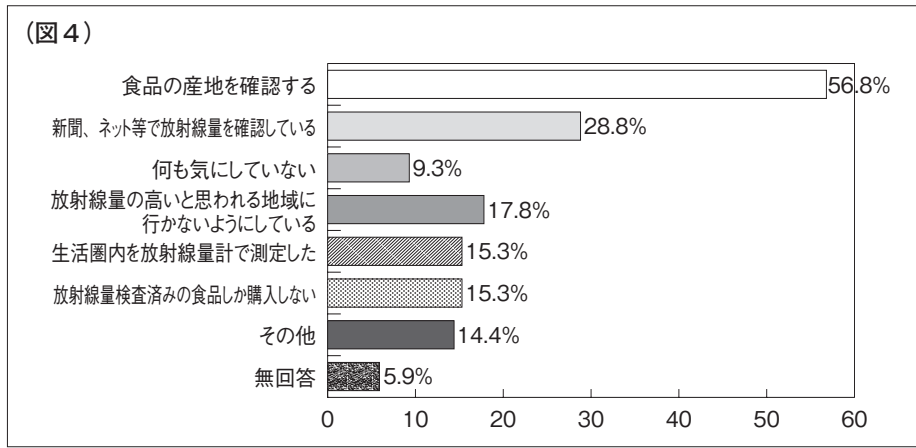
は、東日本大震災の発生から二年以上を経た現在も「訪問して知っている」と回答した参加者は二十%に留まりました。また、「知らない」「無回答」という方も合わせて十五%でした。(図3)



放射能について気をつけているのは「食品の産地」が最多

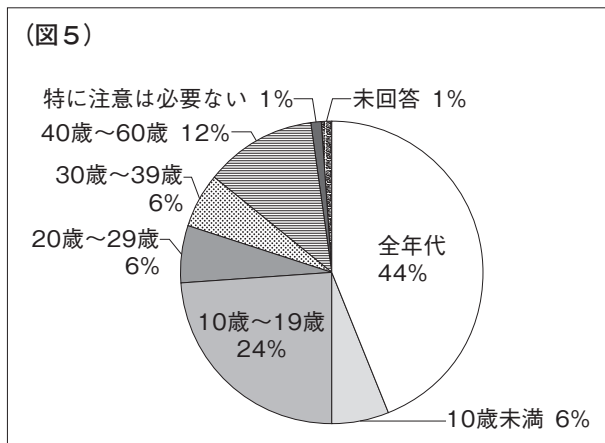
「放射能について気をつけている事がありますか？」(複数回答可、五十一名が複数回答)という問いに関して最も多かったのは「食品の産地を確認する」(約五十七%)

次いで「新聞、ネット等で放射線量を確認している」(約二十九%)「放射線量の高いと思われる地域に行かないようにしている」(約十八%)と続き、順位、比率とも前回アンケートに近い結果となりました。(図4)



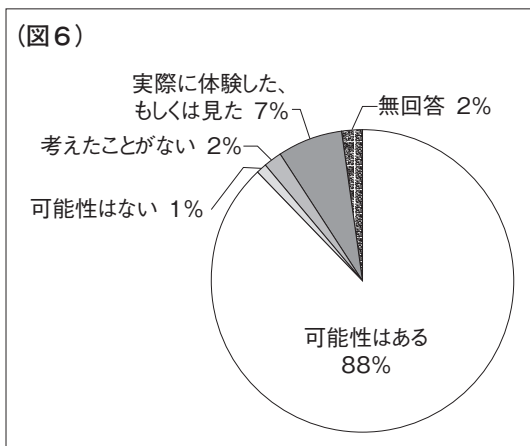
被ばくに関して特に注意が必要な年齢については回答に差

「あなたにとってどの年代が被ばくに関して注意が必要だと思いますか?」という質問に対しては、「全年代」という回答が四十四%と最多でしたが、「特に〇〇歳以下は注意をしている」という回答も寄せられ「十歳〜十九歳以下に特に注意している」という回答が二十四%と、年代を明示した中で最も多くなりました。(図5)



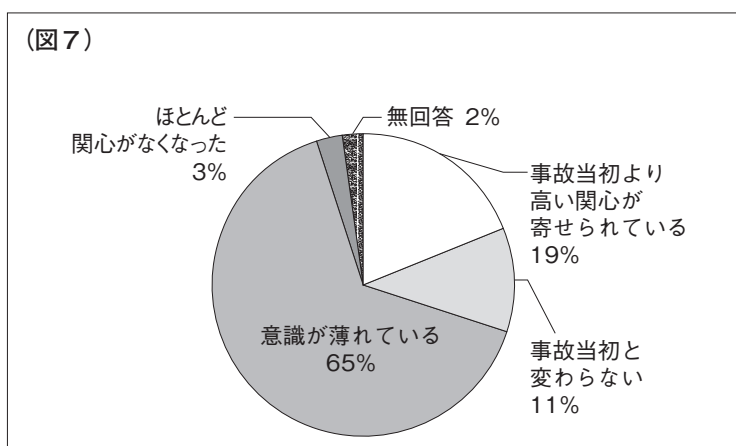
放射能被害を要因とした差別には強い危機感

「放射能被害を要因として、様々な差別が生じる可能性があると思いますか?」の問いに対しては、八十八%が「可能性はある」と回答。「実際に体験した、もしくは見た」という回答も寄せられました。(図6)



「世間の意識は薄れている」と考える方が六割を超える結果に

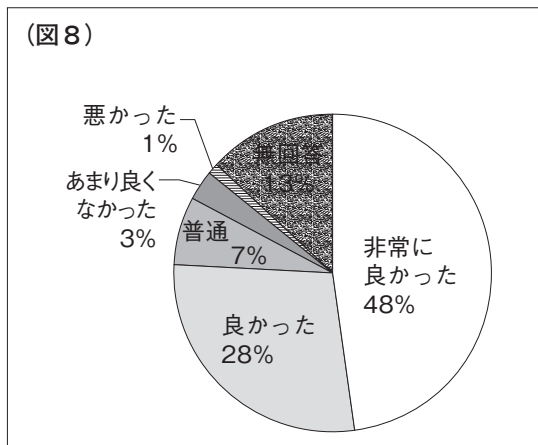
「福島第一原発事故や放射能被害に関し、世間の意識はどのよう



に変化したと思いますか?」の問いに対しては、六十五%が「意識が薄れている」と回答。一方で「事故当初より高い関心が寄せられている」との回答も十九%見られました。(図7)

また、「今回のシンポジウムの内容はいかがでしたか?」の問いには「非常に良かった」が四十八%、「良かった」が二十八%を占めました。(図8)

**集計結果から見えるものと
アンケートで寄せられた声**



「放射能被害とは？」をテーマに開催した今回のシンポジウムでは、参加者の多くが様々な放射能被害に関して不安を抱えていることがわかる結果になりました。特に若い年齢層にはより一層の注意が必要と感じている傾向が見られました。

また、「放射能被害によって差別が生じるのでは」という懸念も強く、実際に事象を目にしたという参加者からは「サービスエリア

のゴミ箱に被災地からのプレゼントの野菜が捨てられていた」「先にお風呂に入らないでと言われた」等、実例が寄せられました。

また、福島第一原発事故や放射能被害に関する世間の意識は薄れていると危機感を感じる参加者も多く、「今回のシンポジウムが良かった」と回答した理由や今後のシンポジウムへの要望には「今後もこうした問題に関するシンポジウムを継続して開催して欲しい」との意見が多く寄せられました。

パネリストの田中徳雲氏は講演の中で「是非一度、福島を訪れてください」と訴え、アンケートでも「田中氏の講演は胸にズシンと来た」「実際に福島を訪問してみたくなった」との声がある一方、被災地を訪問した方は二十%に留まります。「仏教会の方々地域に戻って、地域の人々へ広報を行っていただきたいです。情報格差を痛切に感じます」といった、知ることにの大切さを訴える意見も見られました。

前回のアンケートに続いて宗教

界独自の発信や支援を求める声も根強く、「被災地の復興に協力された僧侶の方の実体験のお話をしてほしい」「主催である全日本仏教会の方向性をもっと示してほしい」「もう少し仏教的要素があるよかった」といった要望が寄せられました。

また、今回のシンポジウムに関して「あまり良くなかった」「悪かった」と回答した方から「放射線被ばくの危険性を強調しすぎで、これでは福島県の住民の方々が途方に暮れる。県民の心に寄り添ったより良い内容を希望する」「原子力発電に条件付きながら賛成のパネリストを交え、両方の意見が聞けると良かった」といった声も寄せられました。

こうして寄せられた意見・要望を踏まえた上で、次回シンポジウム「いのちと原子力③」の開催を企画しています。

詳細は決定次第、本会ホームページにて告知させていただきます。次回のシンポジウムにも多数の参加者の来場をお待ちしております。

「閣僚の靖国神社公式参拝に対する抗議」文書を安倍内閣総理大臣に提出

五月十日、参議院議員会館において、関崎幸孝全日本仏教会事務総長より世耕弘成内閣官房副長官に「閣僚の靖国神社公式参拝に対する抗議」文書を手交した。

四月の靖国神社春季例大祭において、安倍内閣の複数の閣僚が参拝したことに對し、本会は直ちに内閣総理大臣宛ての抗議文を提出した。

本会は、靖国問題を東アジア情勢に関わる外交問題としてとらえるのではなく、政教分離の観点及び戦争被害者の信教の自由に重点をおき、首相及び閣僚の靖国神社公式参拝に對して、参拝を行わない要請と、閣僚の参拝に對する抗議の文書を、過去再三にわたり政府へ提出しており、今後も活動を続ける方針である。



左：世耕弘成内閣官房副長官
右：関崎幸孝本会事務総長

事務総局録事

四月（十六日～三十日）

十六日▼第四十二回全日本仏教徒会議

和歌山・高野山大会第二回事務局会議出席（和歌山県平和会館）

▼帯広仏教連合会坂谷会長来局

▼近畿日本ツーリスト二日市氏来局

▼A B S山中氏・河合氏来局

▼第四回国際交流審議会開催（事務総局会議室）

十八日▼自由民主党参議院全日本仏教議員連盟加入議員と朝鮮半島出身の旧民間徴用者等の遺骨返還問題について懇談（参議院議員会館）

▼里見達人本会第二十六期理事長・静永氏来局

▼第四回宗教教育推進委員会開催（事務総局会議室）

十九日▼オメガコム五十嵐氏来局

▼第七回東日本大震災支援検討会議開催（事務総局会議室）

▼内閣総理大臣主催「桜を見る会」参加（新宿御苑）

二十二日▼局内会議

二十三日▼日蓮宗全国宗務所長会議出席（～二十四日 日蓮宗宗務院）

二十四日▼（公財）国際仏教興隆協会監査会出席（国際仏教興隆協会）

二十五日▼損保ジャパン佐々木氏来局

▼第五回総務財政審議会開催（事務総局会議室）

▼無料法律相談室

二十六日▼閣僚の靖国神社参拝に対する抗議文提出について国会議員と懇談（参議院議員会館）

▼新潟県仏教会理事会において本会事業説明（ホテルセ

ンチュリーイカヤ）

▼長野県仏教会理事会において本会事業説明（三宜亭本館）

二十七日▼第五十九回長野県仏教徒飯伊大会出席（飯田市鼎文化センター）

三十日▼第三回人権問題連絡協議会講演会講師候補者と面談（大正大学）

▼同宗連主催第三回「石川夫妻の幸せを願う宗教者の集い」準備会出席（日本基督教団王子教会）

五月（一日～十五日）

二日▼B N N企画委員会出席（庭野平和財団）

▼田中恆清宮司と面談（神社本庁）

▼第三回人権問題連絡協議会講演会講師候補者と面談（慶応大学医学部）

▼（公財）国際仏教興隆協会正本乗光事務総長他来局

六日▼（一社）仏教情報センター設立三十周年記念大会参加（東京増上寺）

七日▼A B S山中氏来局

▼全日本仏教青年会全国大会参加（大阪 南御堂）

▼東京ブレイズクラブへ本会事業説明（帝国ホテル）

▼真言宗豊山派宗務所訪問（東京 護国寺）

八日▼局内会議

九日▼浅草仏教会主催「寺院備災ガイドブック」セミナー参加（東京 榎寺）

▼文部科学省生涯学習政策局政策課教育改革推進室訪問

▼藤谷光信参議院議員と面談（参議院議員会館）

▼（一社）仏教学術振興会元理事長高崎直道氏通夜参列

▼曹洞宗工藤英勝人権擁護推進本部員来局

▼無料法律相談室

十日▼世耕弘成内閣官房副長官に閣僚の靖国神社公式参拝に対する抗議文を手交（参議院議員会館）

▼天台三山特別拝観打ち合わせ（～十一日 延暦寺・三井寺・西教寺）

十三日▼長谷川顧問弁護士と面談（虎ノ門）

十四日▼（公財）日本宗教連盟平成二十五年第一回幹事会出席（事務総局会議室）

▼D A T新藤氏来局

十五日▼第十一回真宗大谷派関係国会議員同朋の会出席（ホテルニユーオータニ）

▼藤谷光信参議院議員秘書脊尾氏来局

賛助会員入会者ご紹介

【特別会員】

壺阪山 南法華寺 常盤 勝範

【団体会員】

日鐵住金建材株式会社

【個人会員】

大塚 高司（自由民主党衆議院議員）
今野 智博（自由民主党衆議院議員）
武見 敬三（自由民主党参議院議員）
荒井 聰（民主党衆議院議員）
中山 恭子（日本維新の会参議院議員）
（順不同・敬称略）

ご入会いただき、誠に有難うございました。

引き続き賛助会員のご入会をお待ちしております。賛助会員の要項・申込みの流れ及び申込書のダウンロードなど、賛助会員の入会に関しては、本会HPをご覧ください。

第30期第3回人権問題連絡協議会

全日本仏教会
講演会しん しゅつ しょう ぜん しん だん
新出生前診断を考える

～開催のご案内～

今回の講演会でテーマとする「新出生前診断」は、35歳以上の高齢妊娠・超音波検査により胎児の染色体異常が疑われる場合などに、検査基準は設けているものの、従来の検査に比べて簡単な遺伝子カウンセリングと血液検査だけで胎児の染色体異常を99%の確率で見つけることができると言われています。検査による母体へのリスクが少ない分、今後「いのちの選別」が当たり前のように行なわれてゆく時代になるのではないかと危惧されています。

本講演会では、具体的な検査方法についてや、運用にあたってのガイドラインに潜む問題点、親が中絶という道を選択するに至る社会的背景などを探った上で、この問題について宗教者が担う役割も同時に探ってまいります。

【開催日】平成25年7月4日(木)18:00～
※17:30開場

【会場】秋葉原ダイビル5階 カンファレンスフロア
(JR秋葉原駅 電気街口 徒歩1分)

【講師】吉村 泰典 内閣官房参与
柘植あづみ 明治学院大学教授
村上 興匡 大正大学教授

【参加費】無料

【定員】120名(先着順)

【申込方法】本会ホームページの専用フォームから申込、または専用申込用紙にてFAXでお申込みください。

申込開始は6月上旬開始

※問い合わせ先:社会人権部(03-3434-9275)

私たちの未来に関わる大切な問題です。どうぞこの機会にご参加いただきますようお願いいたします。

～全日本仏教会特別企画～

特別拝観「天台三山文化財を巡る旅」

ご挨拶

賛助会員・機関誌『全仏』購読者・本会関係者の皆様へ、半田孝淳会長が座主を務める天台宗総本山比叡山延暦寺を中心とした特別拝観の旅を企画しました。

比叡山延暦寺・西教寺・三井寺の天台三山にて特別拝観をお楽しみいただける、他にはない魅力的な企画となっております。

公益財団法人 全日本仏教会



〔比叡山延暦寺・根本中堂〕

- ◆ご旅行期間：平成25年7月26日(金)～7月27日(土) 1泊2日
- ◆ご旅行代金：大人1名様 15,000円(和室2名1室利用)
(1名1室時は2,100円増) 朝食1回・昼食1回・夕食1回
- ◆京都駅八条口集合及び解散(現地までの旅費は各自でご負担ください)
- ◆募集人員：25名(最少催行人員：15名)
- ◆申込締切日：平成25年7月1日(月)
- ◆お問い合わせ・お申込み先：JTB西日本 団体旅行京都支店
TEL：075-284-0173 FAX：075-284-0153 担当：中島/栃谷
- ◆添乗員は同行しませんが、係員のご案内いたします。

〈特別企画〉

- ・半田孝淳天台座主によるご法話
 - ・千日回峰行者によるお話とお加持
 - ・天台三山にてそれぞれ記念品の授与
- 〈特別拝観〉(通常は入場できません)
- ・大書院(比叡山延暦寺)
 - ・光浄院客殿、勸学院客殿(三井寺)
 - ・收藏庫(西教寺)
- ほか諸堂参拝も企画しております。

※詳細な旅行日程表等は本会ホームページにてご確認ください。 <http://www.jbf.ne.jp/>